

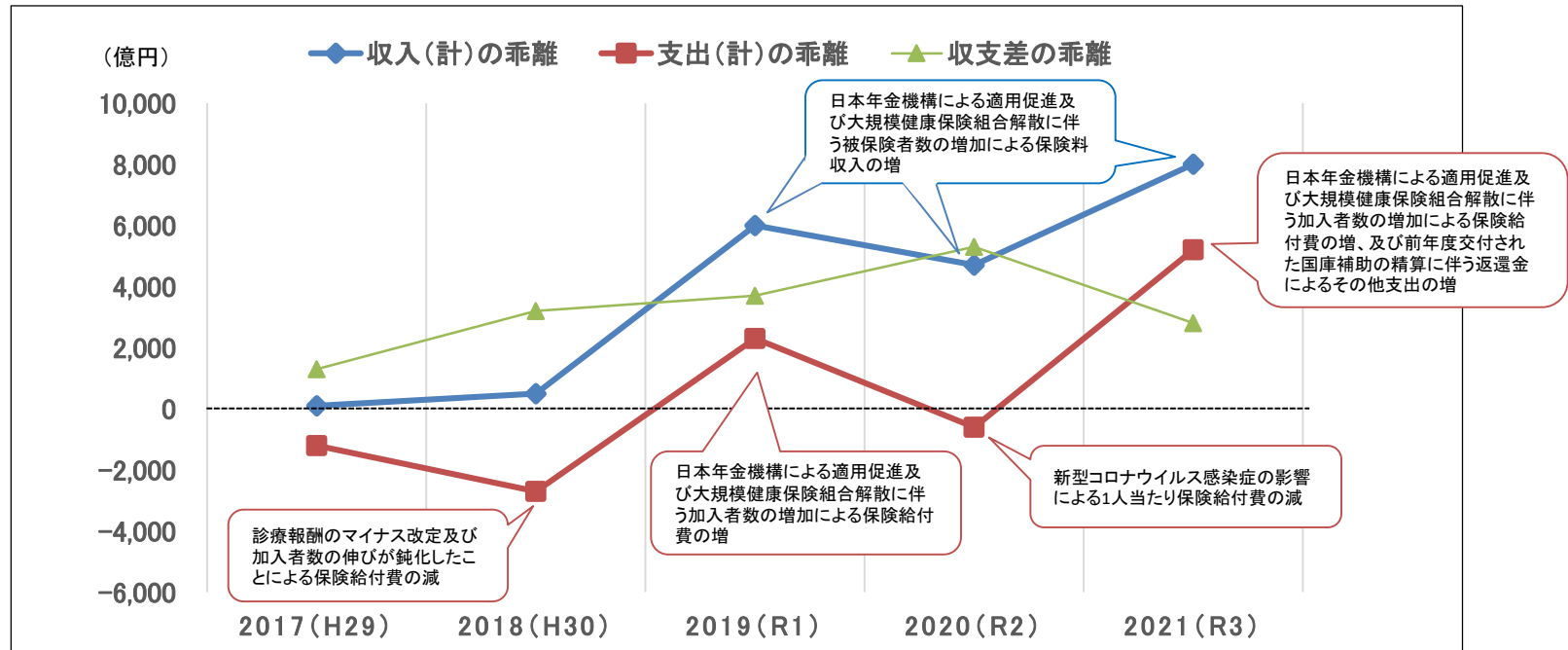
# 収支見通しの検証結果について

# 2017(平成29)年9月試算「5年収支見通し」と「実績(決算)」の比較

下表は、最新の決算である2021(令和3)年度収支について、当該年度の収支見込みが初めて公表された2017(平成29)年9月試算の5年収支見通し(中位パターン)と比較した。

(単位:億円)

			2017(H29)年度			2018(H30)年度			2019(R1)年度			2020(R2)年度			2021(R3)年度			
			5年収支	実績(決算)	乖離	5年収支	実績(決算)	乖離	5年収支	実績(決算)	乖離	5年収支	実績(決算)	乖離	5年収支	実績(決算)	乖離	
2017 年度 試算	収入	保険料収入	87,800	88,000	200	91,100	91,400	300	90,800	95,900	5,100	90,700	94,600	3,900	90,600	98,600	7,900	
		国庫補助	11,400	11,300	0	11,700	11,800	100	11,700	12,100	400	12,100	12,700	700	12,400	12,500	0	
		その他	200	200	0	200	200	0	200	600	400	200	300	100	200	300	100	
		計	99,400	99,500	100	103,000	103,500	500	102,700	108,700	6,000	103,000	107,600	4,700	103,300	111,300	8,000	
	支出	保険給付費	58,600	58,100	-500	61,600	60,000	-1,600	62,200	63,700	1,400	63,100	61,900	-1,300	63,800	67,000	3,200	
		拠出金等	34,900	34,900	0	35,800	35,000	-800	36,500	36,200	-200	36,700	36,600	-100	37,100	37,100	100	
		その他	2,700	2,000	-700	2,700	2,500	-200	2,200	3,400	1,100	2,200	3,000	700	2,200	4,100	1,900	
		計	96,200	95,000	-1,200	100,200	97,500	-2,700	101,000	103,300	2,300	102,100	101,500	-600	103,100	108,300	5,200	
		収支差		3,200	4,500	1,300	2,800	5,900	3,100	1,800	5,400	3,600	900	6,200	5,300	100	3,000	2,900



## 【補足】

- 数値は100億円まるめで表示しているため、合計値が合わない場合がある。
- 2017年度試算: 賃金0.6%、医療費追加ケース(高額薬剤影響を除いたケース)、保険料率10%

○ 5年収支見通しにおける各年度の収支項目と決算上の各年度の収支項目の数値を比較すると、全体的な傾向とその要因は以下のとおりとなった。

① 保険料収入、保険給付費の乖離が大きい。

- ▶ 保険料収入に影響を与える被保険者数、保険給付費に影響を与える加入者数が試算時より上振れしたため。

② 保険料収入の乖離のほうが、保険給付費の乖離に比べて大きい。

- ▶ 被保険者数の伸びが加入者数の伸びを上回ったため。

上記要因について、保険料収入と保険給付費それぞれを検証した結果は次頁以降に記載のとおり



# 保険料収入の検証(2017年度試算と実績の比較)

- 保険料収入の計算に影響を与える基本的な要素は、「被保険者数」と「平均標準報酬月額(賃金)」である。2017(H29)年度当時の5年収支見通しにおける見込みと実績について分析すると以下のとおりとなった。

## 【被保険者数と平均標準報酬月額(賃金)の乖離傾向】

(被保険者数)

**実績が試算を大幅に上回った。**

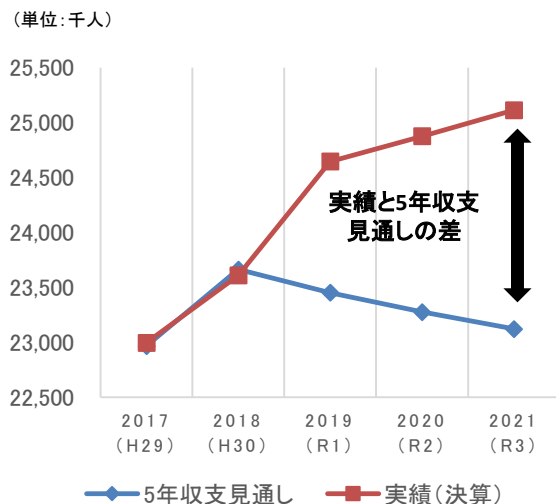
- ▶ 5年収支見通しにおいては、それまでの実績や「日本の将来推計人口(2017年4月)」を踏まえて推計しているため、被保険者数は減少するものとして試算していた。しかし、実際には、日本年金機構の適用促進対策の強化の影響、2019(R1)年度の大規模健康保険組合の解散の影響等により増加した。

(平均標準報酬月額(賃金))

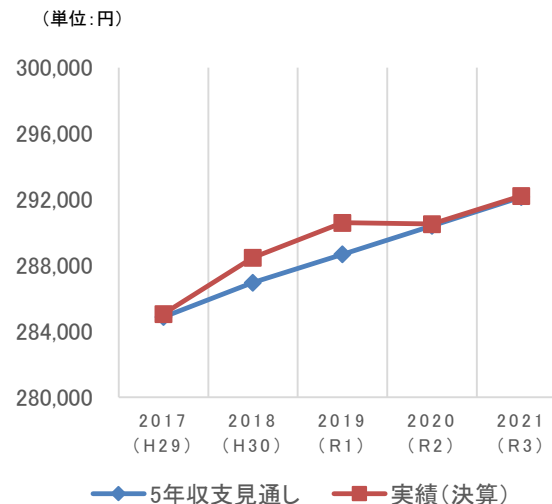
**試算と実績が概ね一致した。**

- ▶ 2017(H29)~2019(R1)年度は実績のほうが高く推移したが、2020(R2)~2021(R3)年度は5年収支見通しと実績が概ね一致している。なお、2019年度から2020年度の実績の伸びがほぼ横ばいとなっている主な要因は新型コロナウイルス感染拡大による経済情勢の悪化による影響が考えられる。

### 《被保険者数の推移》



### 《平均標準報酬月額の推移》



# 保険給付費の検証(2017年度試算と実績の比較)

- 保険給付費の計算に影響を与える主な要素は、「加入者数」と「加入者一人当たり保険給付費」である。2017(H29)年度当時の5年収支見通しにおける見込みと実績について分析すると以下のとおりとなった。

## 【加入者数と一人当たり保険給付費の乖離傾向】

(加入者数(被保険者数+被扶養者数))

**実績が試算を上回った。**

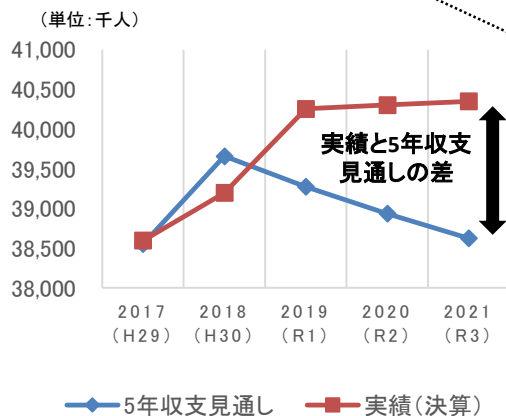
- ▶ 加入者数についても、前頁の被保険者数と同様、それまでの実績や「日本の将来推計人口(2017年4月)」を踏まえて推計しているため、減少するものとして試算していた。しかし、実際には、日本年金機構の適用促進対策の強化の影響、2019(R1)年度の大規模健康保険組合の解散の影響等により増加した。
- ▶ 加入者数は被保険者数と被扶養者数の合計であるが、その内訳を見ると、被保険者は前頁のとおり大幅に増加したが、被扶養者数は下図のとおり試算と実績がほぼ一致している。このことから、**加入者数の実績が試算を上回った要因は被保険者数の増加によるものであることがわかる。**

(加入者一人当たり保険給付費)

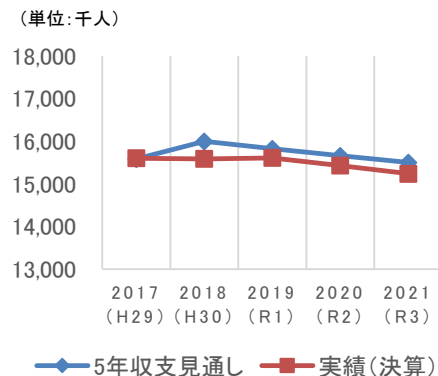
**試算と実績が概ね一致した。**

- ▶ 加入者一人当たり保険給付費については、新型コロナウイルス感染症の影響等があった2020(R2)年度を除き、5年収支見通しと実績の乖離は小さい。

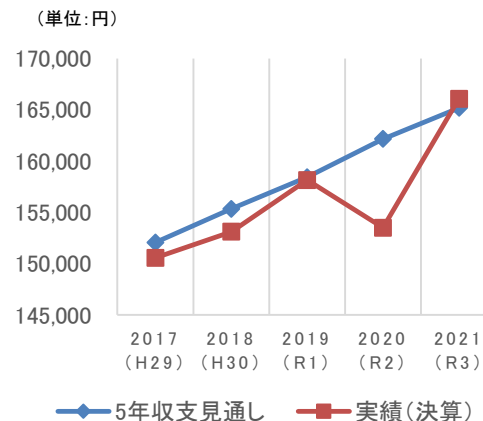
《加入者数(被保険者数+被扶養者数)の推移》



《被扶養者数の推移》



《一人当たり保険給付費の推移》



# 検証結果のまとめ

- 2017(平成29)年9月試算の5年収支見通しと実績を例に「保険料収入」と「保険給付費」の乖離について検証した結果、5年収支見通しより実績が上回った要因は、「**保険料収入**」は**被保険者数の増加**、「**保険給付費**」は**被保険者数の増加を要因とした加入者数の増加**であることがわかった。
- 「収支差」については、上記被保険者数及び加入者数の増加割合のバランスにより乖離が生じることとなるが、今回の検証においては、**被保険者数の増加割合が加入者数の増加割合を上回った\***ことにより「**収支差**」が**上振れした**ことがわかった。

※ 被保険者数が試算より大幅に伸びた一方で、被扶養者数は試算と実績がほぼ一致していたことによる。

